

今月から「OVTA-China」のメンバー「樺島:カバシマ」さんに、面白い、ハットする文章を書いていただきました。

【性善か、性悪か】

日本人の海外旅行は 1980 年代後半からのバブル景気で更に増幅され、低成長時代に入っても海外旅行ブームは衰えず、世界の津々浦々で老若男女を問わず日本人観光客を見掛けるようになった。SARS や米国の 9.11 テロで一時期落ち込んだ海外旅行も、2005 年の出国人数は 1740 万人を突破、これから数年は団塊世代の退職を迎え、海外旅行に一層拍車がかかるであろう。一方海外からの観光客も 2005 年の訪日外国人は過去最高の 673 万人を記録し、観光地も従来の京都や奈良、日光や鎌倉などの名所旧跡から、北海道の雪祭りやスキー場、日本の温泉めぐりなどの新しい観光資源が外国人を惹きつけている。

経済面では、廉価な労働力や海外市場を求めて、日本企業の海外進出が一段と進み、産業の空洞化が進みつつある一方、バブル崩壊後は外資ファンドが日本の証券市場に進出し、また M&A で日本企業の買収も始まっている。

このように日本の国際化が深化するにつれて、日本人の意識のなかに「日本の常識は世界で通用しない」といった認識が、じょじょに浸透しつつあるように思う。しかし、日本人の潜在意識のなかに、世界に通用する常識がまだ定着していないのも事実である。

わたしは旧満州国(現在の中国東北地方)生まれの中国育ちで、敗戦後父が中国共産党軍に医者として留用(残留させて技術を利用すること)を命じられたことで、戦後十年間家族とともに中国各地を転々と移動した。その間中国人の学校に通い、中国人とともに生活してきた時期がある。

17 歳で日本に引き揚げ、高校・大学は日本の教育を受け、就職してからは日本の企業戦士として訓練を受けた。感受性の強い血気盛んな青少年期に、中国と日本で生活し教育を受けたため、絶えず中国人的発想と日本人的発想の狭間で苦悩してきた。

結婚してしばらくしてから家内に「わたしは国際結婚したような感じがする」と、ふたりの発想の違いを指摘された。その発想の違いとは、中国人の発想の原点の一つである「性悪説」と日本人の「性善説」にあると、かなりあとになってから気づいた。

それでは先ず「性善説」と「性悪説」につき簡単にご紹介しよう。

「性善説」とは孟軻(BC372～289)が著した「孟子」の「告子章句上」による。

孟子曰く、「人性之善也、猶水之就下也。人無有不善、水無有不下。(中略)

ひとのふぜんをなましむべきは、そのせいまたなほかくのごとはればなり
人之可使為不善、其性亦猶是也。」(説明訳文:人本来の性質が善であるのは、水が下に流れるのと同じようなものだ。人が善でないことは無く、水が下に流れないことは無い。人が不善な行為をし得るのは、人本来の性質も水のそれと同じく、外部の影響を受けるからである)

その孟子の説に異を唱えたのが「性悪説」で、荀況(BC298～235)が著した「荀子」の「性悪篇第二十六」による。

「人之性悪。其善者偽也。」(人の本来の性質は悪である。それが善である者は、人為

の結果である)に始まるこの章は実に含蓄がある。少し長いが、説明訳文のみをつけておこう。(人本来の性質は、生まれながらにして利を好むもので、このままにすると、争奪が生じて、遠慮がなくなる。人本来の性質は、生まれながらにして憎悪の心があるもので、このままにすると、他人に危害を加えるような行為をし、まごころや誠実さが失われる。人本来の性質は、生まれながらにして美しいものを見たい、聞きたいという欲望、音楽や女色を好む傾向がある。このままにすると、人の道を外れた行為が横行し、礼や義や条理が消滅する。これらのことが正しいとするならば、人本来の性質に従い感情の趣くままに行動すると、必ず争奪が生じ、条理が犯されて乱れ、秩序が崩壊することになる。だから必ず正しい導き手、礼と義による感化があって、その後初めて遠慮の心が生まれ、条理に合致し、世の中が治まる。以上のことから考えると、人の本来の性質が悪であるのは明らかである。それが善である者は、人為の結果、そうなのである)

孟子の「性善説」も荀子の「性悪説」も人の本性を善と悪の両面からとらえたもので、表裏一体のものである。要はなぜ礼節や信義を以って教育しなければならないかを説いたものである。同じ儒教の教えでありながら、なぜ本家の中国では「性悪説」が残り、日本では「性善説」が定着したのだろうか。その理由は、日本が海で隔絶された単一民族に近い国家であり、長年神仏共生の影響で内部融和、相互信頼、相互扶助が重んじられたことによるのではなかろうかと私は思う。

ここで中国と日本の違いについて、二つほど具体例を挙げてみよう。

【病院での支払い】

◆ 中国の場合、治療費の取りそこないを避けるため、初診、再診、入院を問わずすべて現金の前金制である。医は仁術というが、中国ではすべてが金銭至上主義である。北京駐在時代のある日の未明、わたしは原因不明の高熱と悪寒に襲われ、取り急ぎ手許の現金 2,000 元(約3万円)を持ちひとりでタクシーに乗り中日友好医院の緊急外来に駆け込んだ。40 度近い高熱でふらふらしながらも、自分で診察料を支払い内科当直医の診察を受けた。医者より血液検査の結果白血球が多いので、入院して精密検査

をする必要があると診断された。早朝 8 時を待って入院窓口へ行くと、保証金として現金1万円を今すぐ納付せよとのこと。手許に現金は 2,000 元しかないと告げると、それでは入院手続きはできないとの一点張り。クレジットカードを提示して、それで1万円を支払い、ようやく入院手続きを終えた。

最近北京や上海等の大都市では、損保会社と契約すればキャッシュレスで医療行為を受けられるようになったが、地方都市ではこの方式はまだ通用していない。

- ◆ 日本の場合、外来受付窓口に健康保険証さえ提示すれば、初診、再診を問わず診療してもらえ、診療が終わって初めて会計窓口で支払うことになる。薬は最近医薬分業になったので、処方箋を外部の薬局に提示し薬を購入する。入院の場合でも、一般的に前金を要求されることは稀である。これは日本の病院システム自体が患者を信用することを前提にしているためである。即ち、人は善であるとの発想から出ている。ところが日本社会にも変化が起こり、最近治療費未収が多発しているようだ。2005 年 3 月 7 日付の日本経済新聞によると、入院ベッド数 500 床以上の大病院で、1病院当りの入院患者の平均年間未収治療費が5,000 万円以上になっていると報じている。患者の不払いが増えた原因として、二つの理由を挙げている。

- ・ その一つは、所得の目減りで治療費が払えない。
- ・ 二つ目は、患者の意識の変化である。

この中には在留外国人の増加もその一因であるようだ。

【デパートでの支払い】

- 中国では、売り場店員は購入品の伝票を書くだけで、お客はその伝票をキャッシャーに持参して支払いを済ませ、支払い済み捺印の伝票を売り場に持ち帰り、購入品を受け取るシステムになっている。それは売り場店員の不正を回避するためにとられた措置である。

- 日本では、お客が購入品を決めたら売り場店員に直接現金かクレジットカードを渡すのが一般的である。クレジットカードが裏でどのように処理されているか、お客はあまり気にしていない。それはデパートというところを信用しているからである。しかし最近一流ホテルのレストランでもカードのスキミングが発生して、「信用」が崩れつつある。

一概に外来文化の影響とはいいたくないが、最近の企業文化の変化を見るにつけ、日本企業における「性善説」に立脚したこれまでの企業倫理が崩れつつあるように思う。また最近の企業トップの倫理欠如の具体例は枚挙に暇がない。

企業の顧客情報漏洩では、ソフトバンク BB で事件が発生した。孫正義社長は「性悪説」という表現で、再発防止策を講じた。情報管理を一箇所に集約し、ガラス張りのオフィスに監視カメラ、入退室の金属探知機などを設置したと新聞は報じている。その後、氷山の一角かも知れないが、通販のジャパネットたかた、コスモ石油、日本信販などが相継いで大規模な顧客情報漏洩事件を引き起こしている。

特許の開発者に対する対価については、青色発光ダイオード(LED) の開発者中村修二氏が日亜化学工業在職中にもらった僅かな報奨金を不服として、退職後同社を相手取り特許対価 200 億円の訴訟を起こした。4年間の係争後、2005 年 1 月両者の和解が成立し、約

8億4000万円で決着した。

この青色発光ダイオード訴訟を契機に、オリンパス光学(ピックアップ装置)、味の素(人口甘味料)、日立製作所(光ディスク読み取り)、三菱電機(携帯電話フラッシュメモリー)などの企業で、発明者から発明した特許に対する対価要求の訴訟が持ち上がった。従業員がその企業を相手取り特許開発の対価を要求する訴訟を起こすとは想定していなかった企業側も、職務発明に対する取り扱いを真剣に検討している。

また多くの「企業不祥事」が内部告発によって明らかになっている。例えば、原子力発電や関西電力の「記録改ざん」、日本ハムや雪印乳業の「偽装」、三菱自動車の「リコール隠し」などが挙げられる。最近では不二家の例が話題になっている。警察内部の公費乱用の告発も起こっている。内部告発者を保護する法律「公益通報者保護法」がようやく内閣府で政令案が策定され、2006年4月から施行された。しかし、日本の企業文化として内部告発はなじめないのではなかろうか。

また一般社会でも政治家への贈収賄、公務員の汚職、教職員の性的不正行為、学校におけるいじめ、家庭内暴力など、すべて「性善説」が崩れつつある証ではなかろうか。

このような世の中であるからこそ、日本人独特の「善」を好むところを、これからも尚一層大切にしてもらいたい。国際化の進展にともない、今後は「性悪説」に立って物事に対処する心構えも必要ではなかろうか。

(樺島 康介:記)

樺島 康介 (財)海外職業訓練協会 国際アドバイザー: 857
